

維持透析患者における足趾/上腕血圧比(TBI)測定の有用性

第 52 回 日本透析医学会学術集会

丸山禎之・逸見加代・秋山早苗・戸田和美・桜井美紀・林 彩子・我那覇志真子・松本愛・岡本真由美・和田 茂・佐々木敏作(佐々木内科クリニック 腎センター)

【目的】動脈硬化の指標として TBI 測定の有用性についての検討

【方法】(1)当院透析患者 85 名に対し、オムロンコーリン社製 form PWV/ABI を用いて PWV・ABI・TBI を測定し、全死亡の追跡調査。(2)3 年間の経年的推移(対象 21 名)。(3)血中アディポネクチン(adp)の測定(対象 69 名)。

【結果】(1)観察期間中(平均 27.4 ヶ月)14 件の全死亡を認めた。ABI0.9 未満群、TBI0.6 未満群はそれぞれ正常群に対して有意な死亡率の上昇を認めた。(2)PWV、ABI は 3 年間で変化がみられなかったのに対し、TBI では初回平均 0.70、2 年後 0.62、3 年後 0.53 へと有意に低下した。(3)adp は BMI と有意な逆相関($r=-0.56, p<0.00001$)を認めしたが PWV、ABI、TBI との相関は認めなかった。また初回平均 $19.8 \mu\text{g/ml}$ から 1 年後 $18.7 \mu\text{g/ml}$ へと経年的に低下傾向が見られた。

【結論】TBI は動脈硬化性病変の進展を鋭敏かつ継時的に反映し、その低下が全死亡の有力な予測因子となりえることが示唆された